

## わたしの旅・山陽道・瀬戸内②

一杉 秀樹

早朝八時過ぎの着岸であったせいか大崎下島御手洗みたらいの集落は静かであった。というよりこの、かつて瀬戸内海を多くの船が行きかっていた頃、風待ち港として人で賑わい、女郎屋が何軒も立ち、多くの物品が運ばれて栄えた町は一部の観光客以外には忘れられたところとなっているようである。

廃れたとはいえ、昭和初期までは瀬戸内海を帆船が運航していたようであり、御手洗の細く曲がりくねった街並みには往時を偲ばせる映画館や時計店などが残され、一部は営業を続けている。そして家々の格子戸には生け花であったり小さな絵画であったり飾られ、たとえ観光客の目を引こうという目論見であるにせよ、どこか古い日本を偲ばせるたずまいである。三十分もあれば廻ることのできる集落を一時間もぶらぶらした後、これもまた一日一便しかない大崎上島へのフェリーに乗り込んだ。

大崎上島は大崎下島の東に位置しその西側の明石の船着き場まではすぐである。島を一周する道路はあるがバスの便は極めて少ないので海沿いの道を歩く。気持ち良い眺めが広がる。この島はかつて造船で栄えた歴史があり、その中心地であった木江きのえの集落には船大工の手によると思われる木造三階建ての家が多数現存している。なるほど、と違って眺めたが困ったことに食事処が全くない。歩けども歩けどもない。結局十時から歩き始めて二時過ぎによく天満港という船着き場の売店でカップ麺にありついた。野良猫が物欲しそうに寄ってきたので一緒に食べた。

暫くして来たバスにほうほうのいで乗りこみ、宿のある島の北側大西港に辿りついた。このあたりが現在の島の中心地で、歩いた辺りは、以前はともかく今は過疎となった地域であることが判った。

宿は旅館・料理と看板にあるが、夕食にはさんまの丸干し、朝食は塩サバであった。主な利用客は工事などで出張してくる人たちと見受けられた。これも瀬戸内の島の現実ではある。